未来を担う子どもたちへの教育

甲子園出場に導く名将の人間教育

※鼎談とは、3 人で向かい合って話すことを意味します。

令和5年8月16日の甲子園3回戦、茨城県代表として出場した土浦日本大学高等学校（以下、「土浦日大」）と千葉県代表として出場した専修大学松戸高等学校（以下、「専大松戸」）の両校は、白熱した試合を繰り広げ、人々に感動を与えました。

両校を率いたのは、いずれも取手市在住の持丸監督（専大松戸）と小菅監督（土浦日大）。2人の名将に、野球を通じた子どもたちへの教育方針や教育への熱き思いを伺いました。

▶鼎談の様子を動画で公開

市ホームページでは、鼎談の様子を動画で公開しています。紙面の都合上、掲載することができなかった内容などもご覧になれます。

甲子園での激闘を振り返る

中村市長（以下「中村」）　令和5年夏の専大松戸対土浦日大の試合は、大変白熱した試合であり、私たちに大きな感動を与えてくれました。私も野球を経験した人間として、試合展開に目が釘付けになりました。

テレビで観戦しましたが、3回ぐらいまでの持丸監督のすごみに、小菅監督は冷静を装うのが大変なのかなと見ていました。

小菅監督（以下「小菅」）　圧倒されていました。

スコアボード（試合の経過）

令和5年8月16日、阪神甲子園球場（兵庫県西宮市）で開催された甲子園3回戦で両校が対戦し、土浦日大が勝利した。

（先攻：専大松戸、後攻：土浦日大）

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
専大松戸	3	0	3	0	0	0	0	0	0	6
土浦日大	0	0	5	1	3	0	0	1	×	10

持丸監督（以下「持丸」）　5回までに点数を取り過ぎると、あとが続かないんですよね。ですから6点取った後、1点でも2点でも取れればいいんですよ。選手には「（追加）点が取れないと負けるよ」と言ってました。

結局、点は取れなかったのですが、取れる可能性もあったんですよね。もうあの負けは仕方ないかなと思います。

小菅　甲子園はコールドゲーム（以下、「コールド」）（※1）がないですからね。コールドがあると、あと何点取ればコールドという勢いもありますが、終盤勝負で後半、流れは変わりますからね。

持丸　一度流れが変わると、再び流れを自分たちに持ってくるのは難しいものです。子どもたちに期待するしかないです。

中村　チームづくりは奥が深いですよね。毎年状況が変わっていくから大変ですよね。

持丸　監督というのは、選手たちに間違いなどがあっても、飲み込めるような感覚を持たないと駄目ですね。

一つ一つのミスを叱責（しっせき）してしまうのはタブーですね。

※1　コールドゲーム
野球で、降雨・日没、その他得点がかけ離れているなどの事情により、審判員が試合終了を宣告する試合。（参照：広辞苑第五版）
高校野球では、7回を終われば正式試合として記録されるが、得点差としては、5回10点または7回7点差がつくとコールドゲームとなる。（参照：高校野球特別規則（2023年版））